倭文庫

二拘七編

立齋

在於作國点画

錦重堂梓

へ13
3836
11

甲寅春新刊

万寺應賀作

外題 豊玉同画

上

門へ13
記3836
巻11

應賀作

囲爐裏

繡像釋迦八相倭文庫二拾七編序

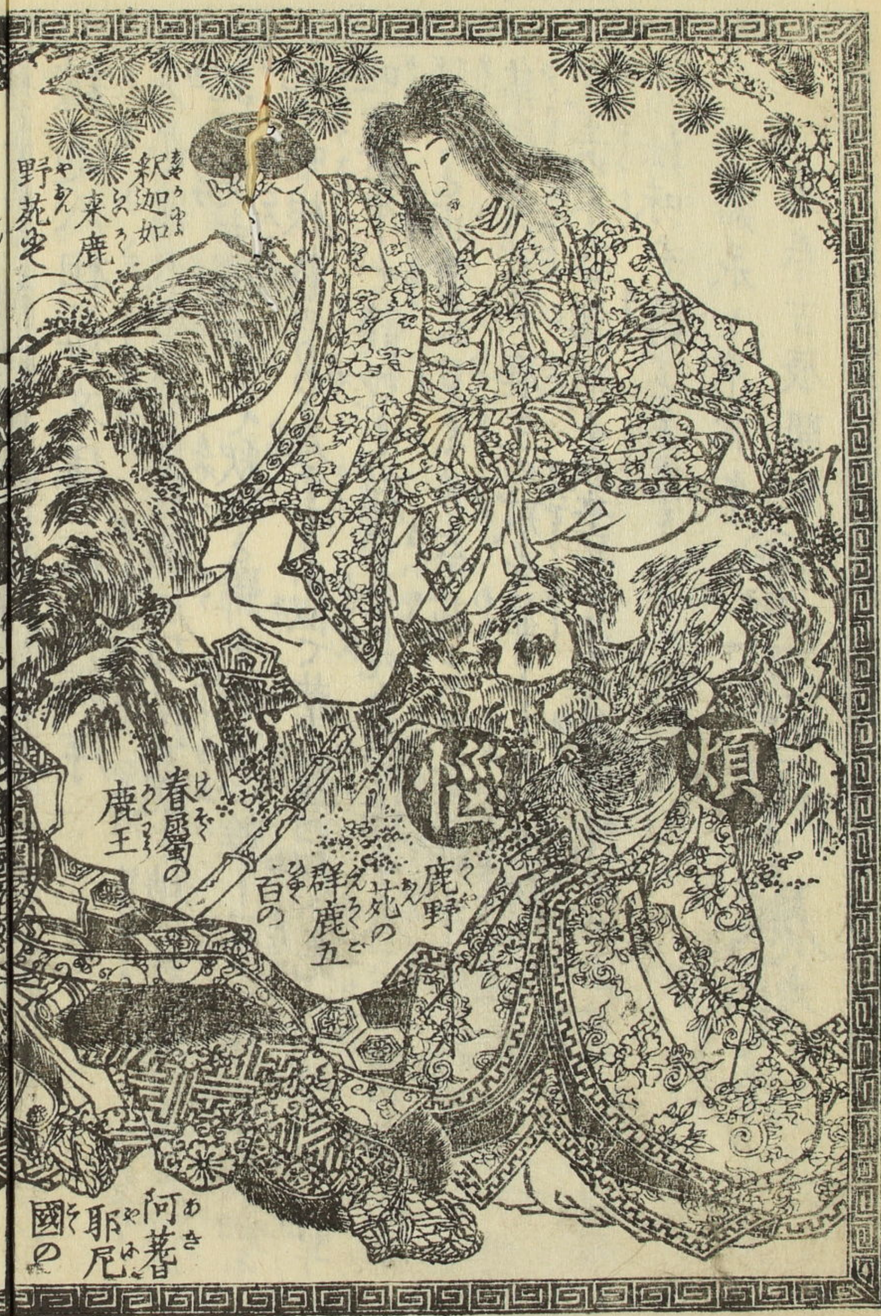
釋迦八相倭文庫二拾七編序

夫悉達太子出山の朝風破衲を飄し積雪敗鞋を埋然燈の記を受て獨歩して釈迦と號し雪山の朝七思惟して雅音頻伽の比を唯根熟のの為ふるが似て華嚴四阿含の先影響與聾啞文殊して龍蛇を雜や奈苑ふ敝并垢を衣て珠御の舎那をと隠とと正書ふ見えう奈苑とふ是鹿野苑也されば茲ふ六度集經をこきそ鹿王の戒を著し又仁王經の須陀摩王と班足王の不安語戒を堅立太子と尼狗陀天子ふ草拳擬て聊佛心の法味を蒔とあるを

嘉永七甲寅年
孟春吉辰開市

万亭應賀識

九十九人の國王
九十九人の國王ハ五戒を授阿羅漢果を得ることを
尼拘陀天子及び
堅立太子と鹿王とを度
尼拘陀天子
堅立太子


釈迦如來鹿野苑に
煩惱
鹿野苑の群鹿五百の
眷屬の鹿王
阿蕃耶尼の國の

摩訶國の
優樓頻螺
加葉其二人の
従弟
寶錦女
那提
加葉
①

那提加葉

仰閣加葉
釋迦如来ゞ
害せん為龍王の嬢寶
錦女無垢錦女ゝ

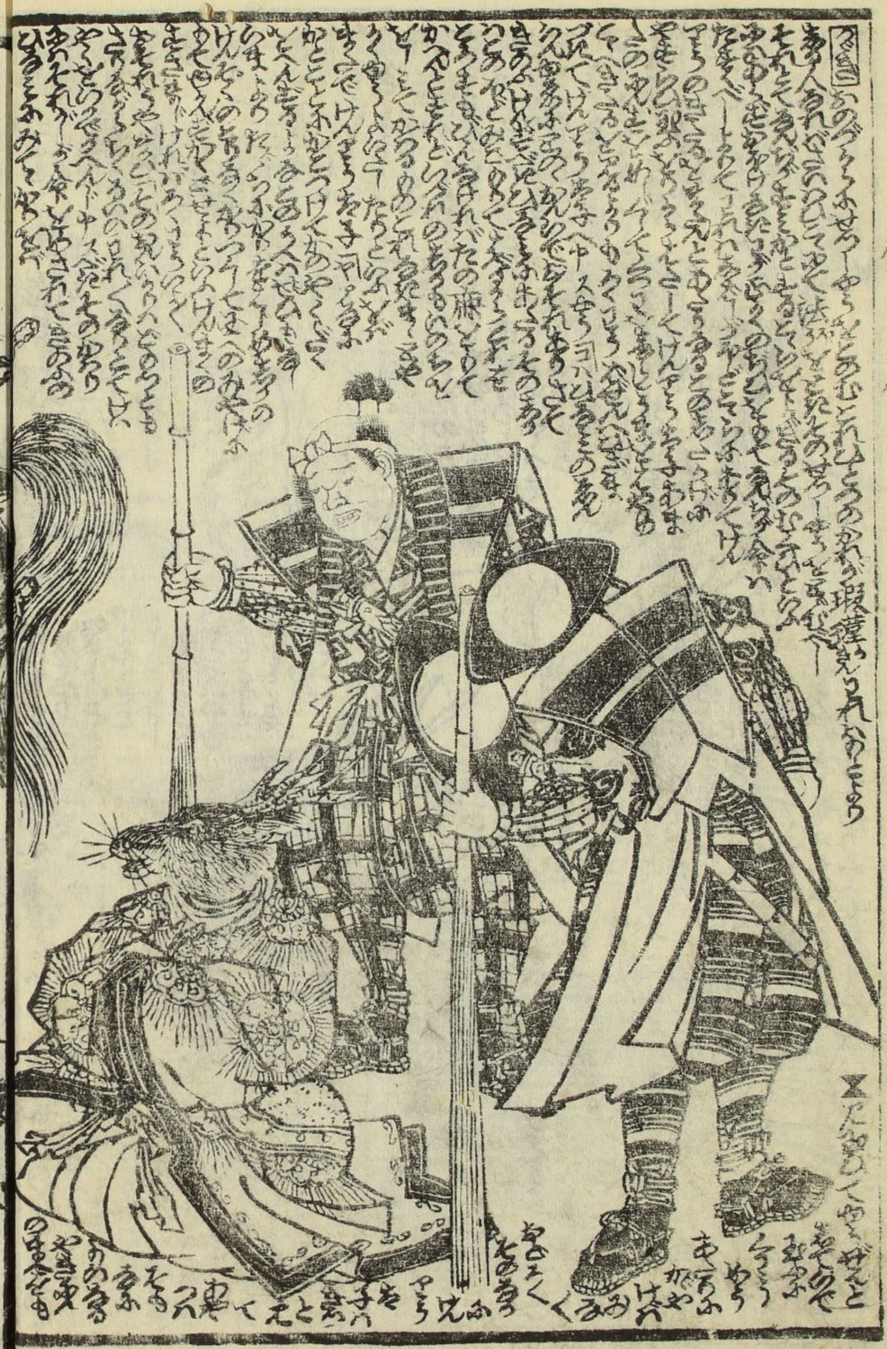
伽閣加葉

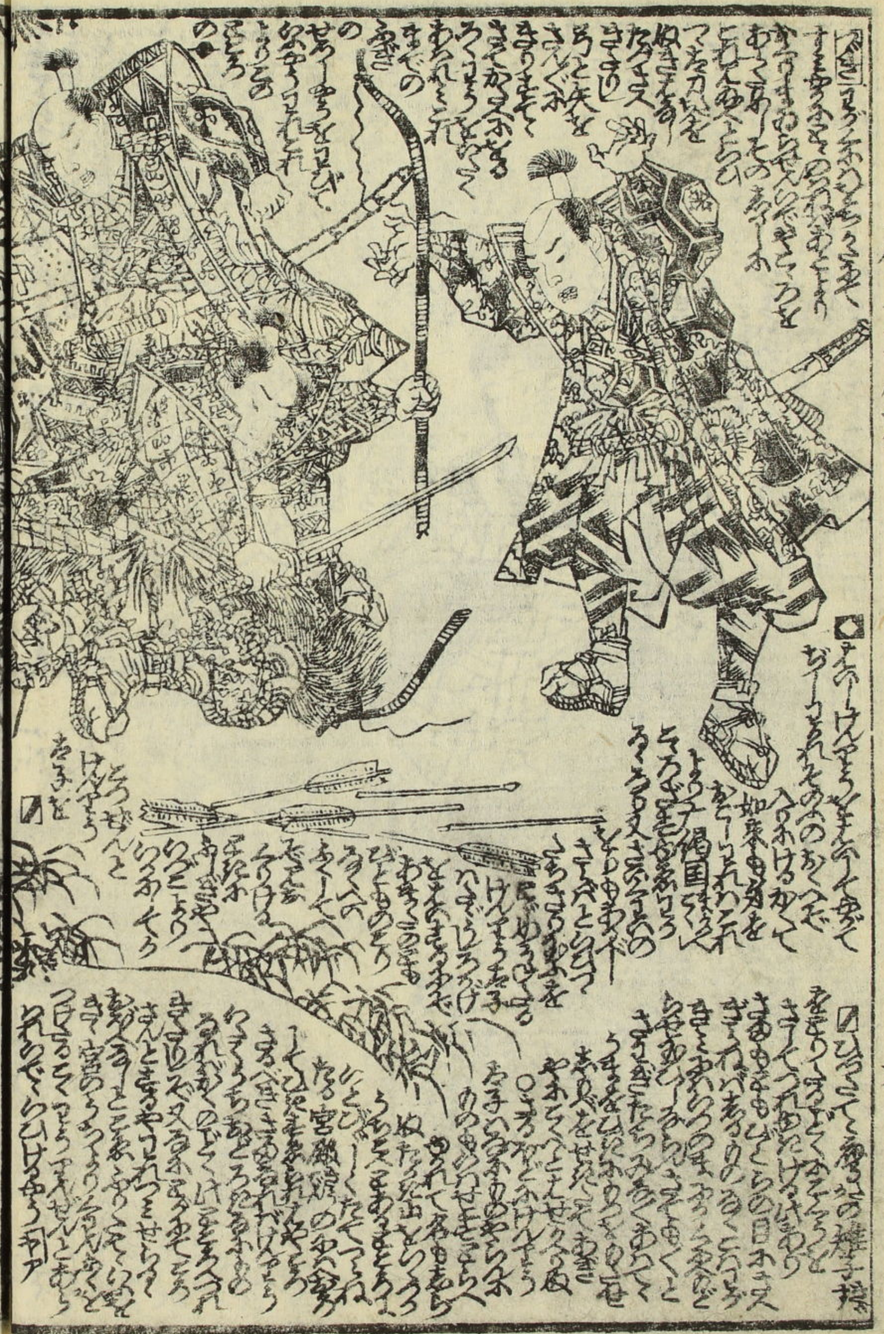
ゝ已
家
連れる

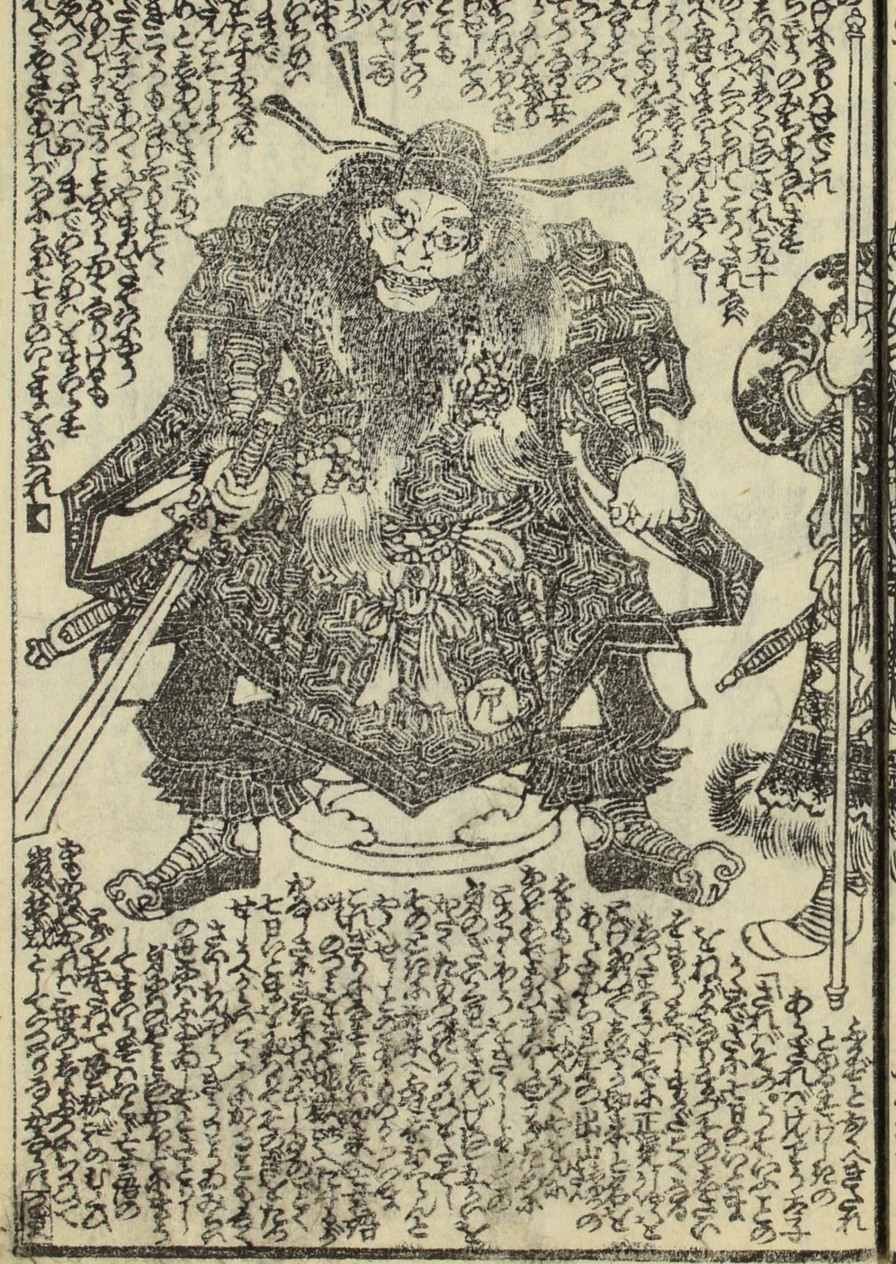
優留頻螺
加葉

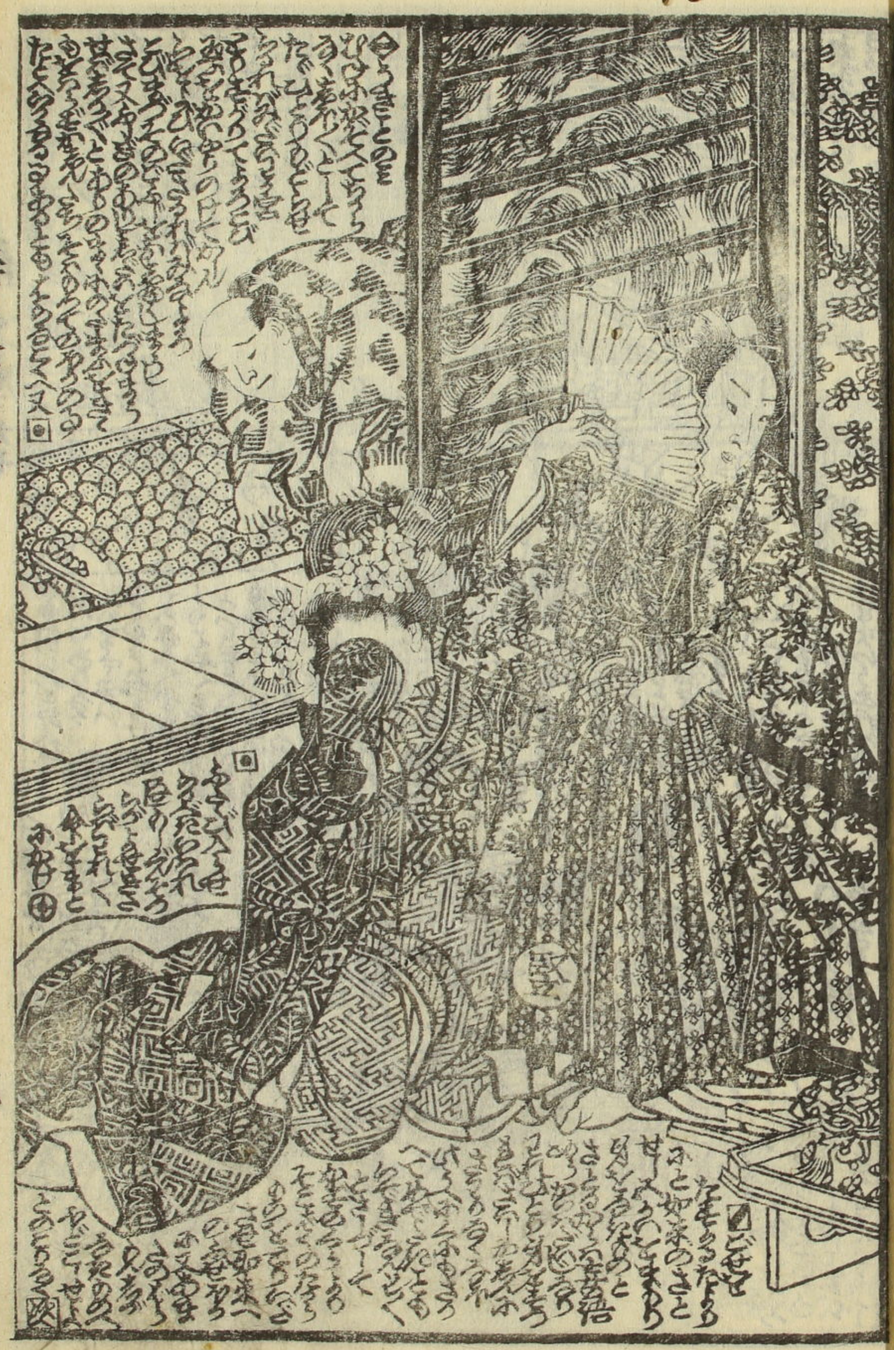
無垢錦女

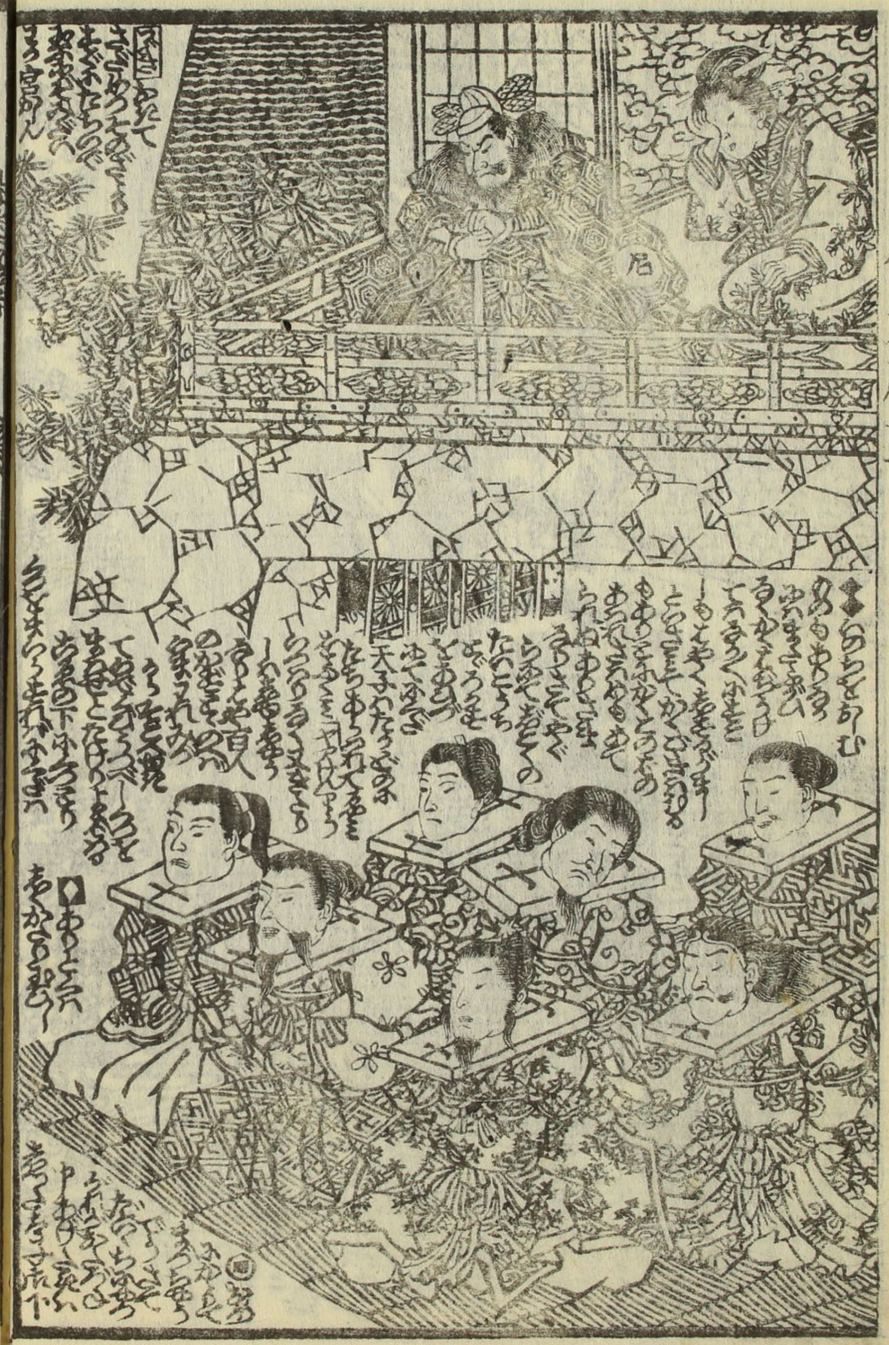
波羅奈國
鹿野苑











嘉永七甲寅春新版目録

倭文庫 九七編ヲ三十編迄 万亭應賀作 為年出板仕ル 一陽齋豊國画

赤松譚 九編 如渊外史作 十編 一圓齋國麿画

重ね井菱深川小紋 三編 為永春水作 四編 一陽齋豊國画

茶番案文 万亭應賀作 一陽齋豊國画

大寶御江戸圖 奉書六枚半續 極上彩色摺 明細ニ改メ出ル

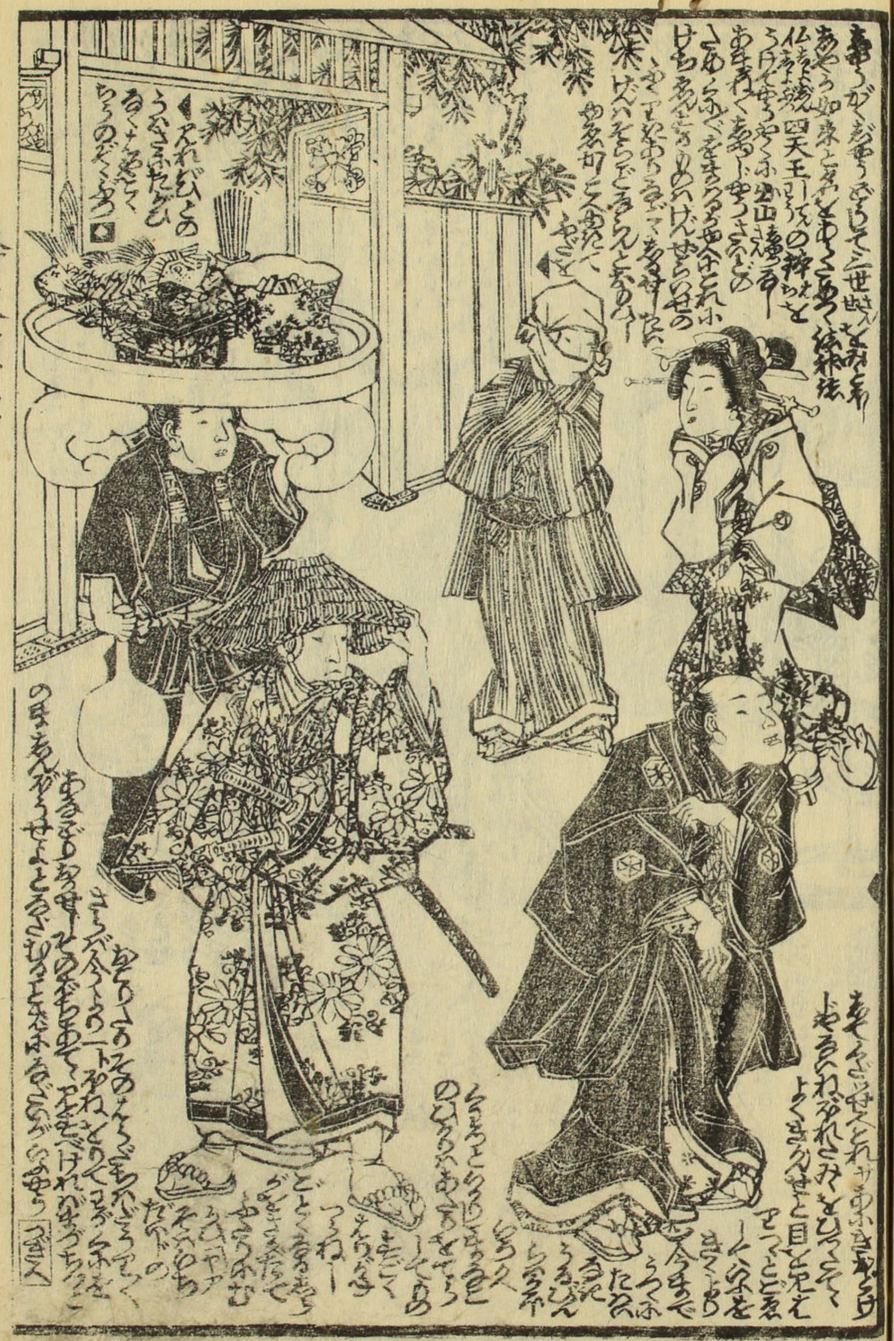
童絵さうし本類 人形町 版元 上州屋重藏

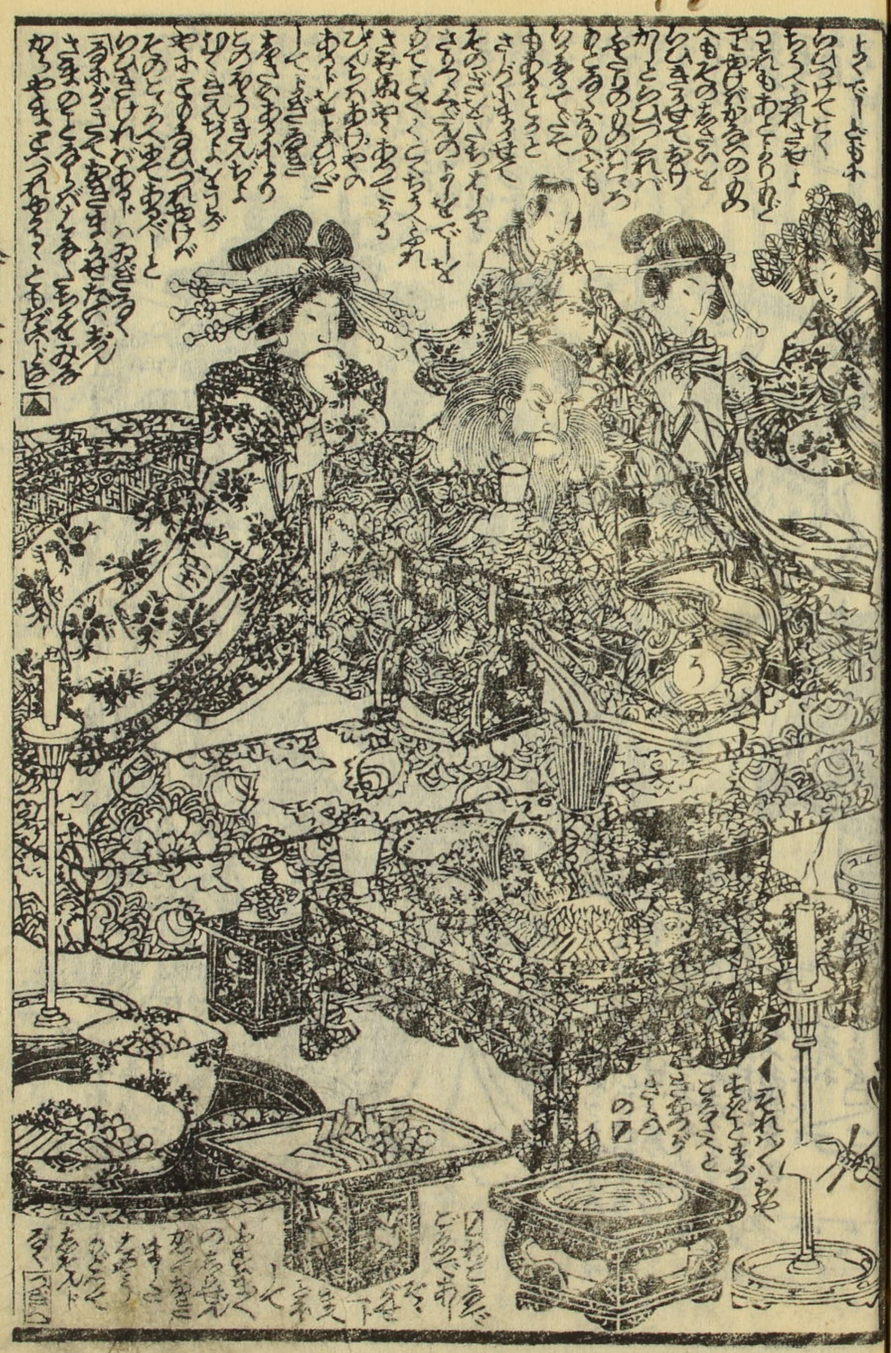
倭文庫二拾七編

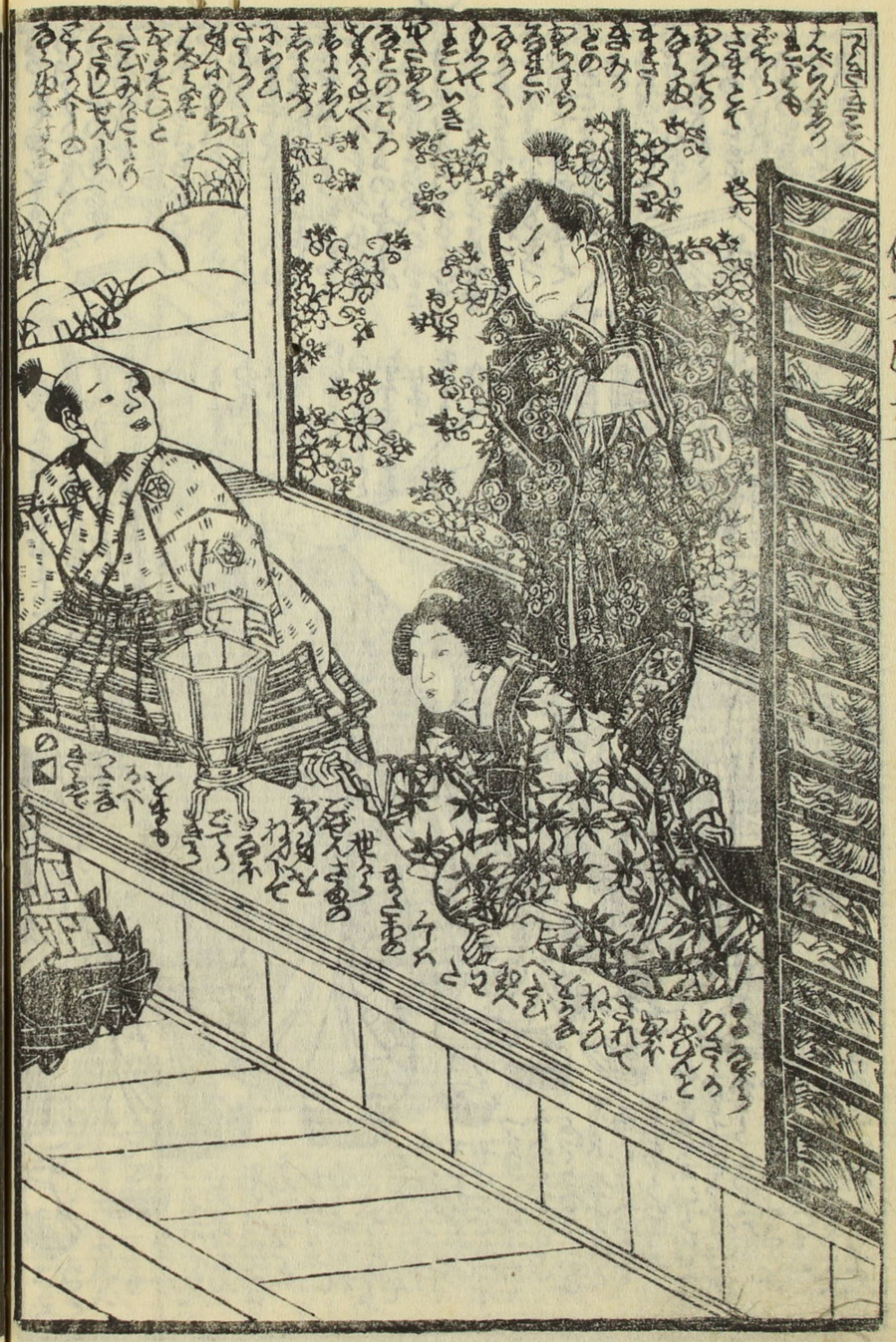
二世歌川國貞画

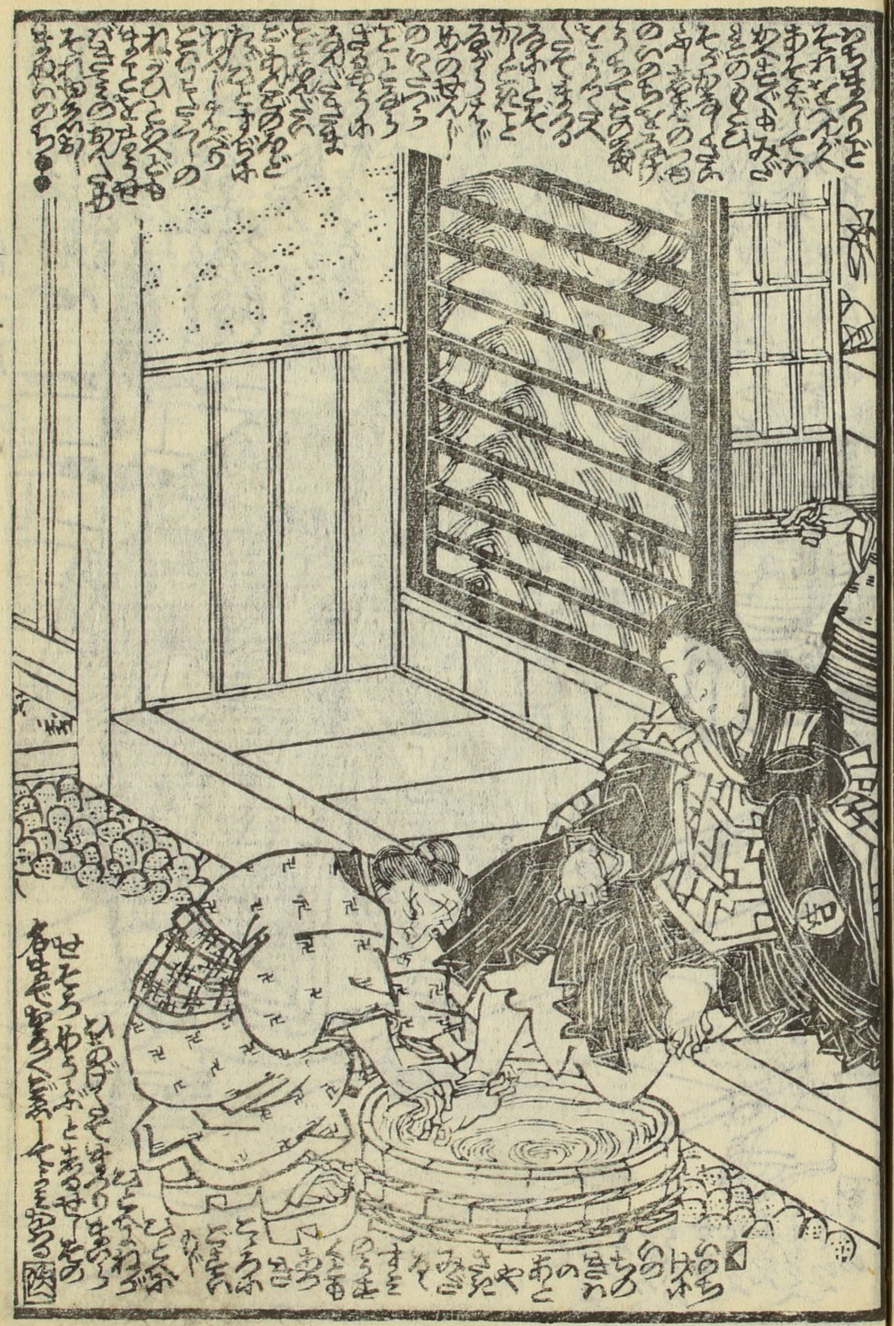
錦里堂版

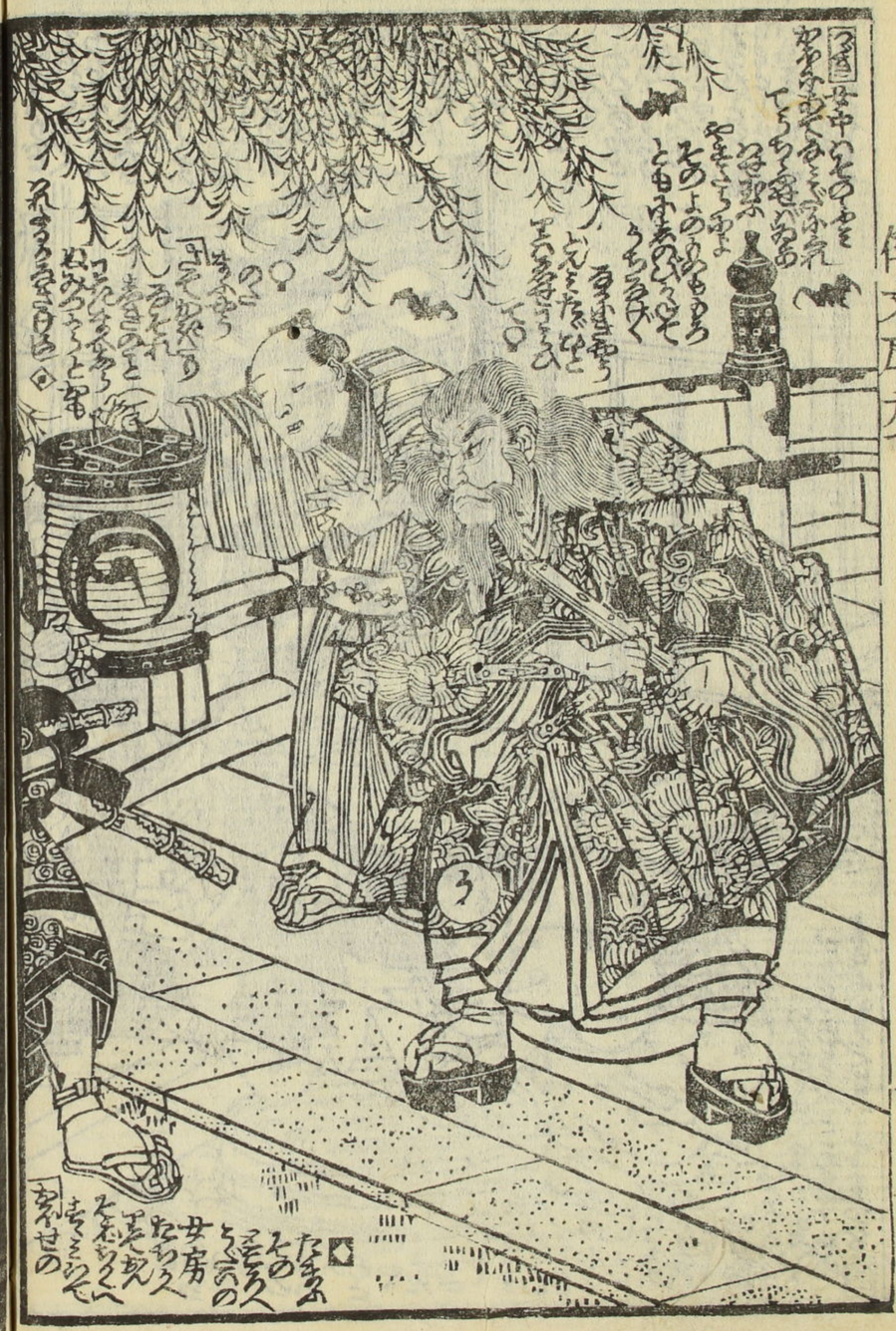
下

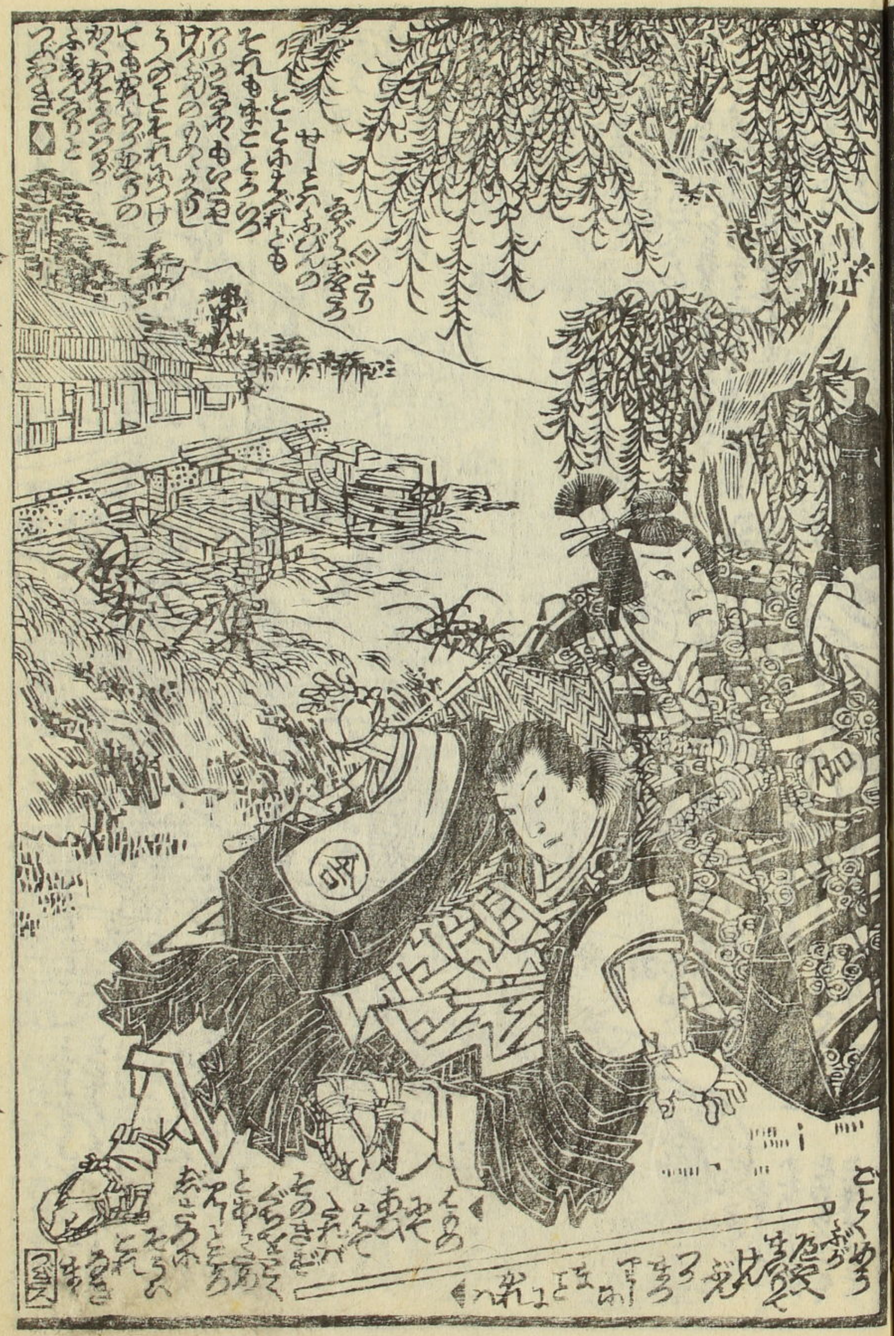


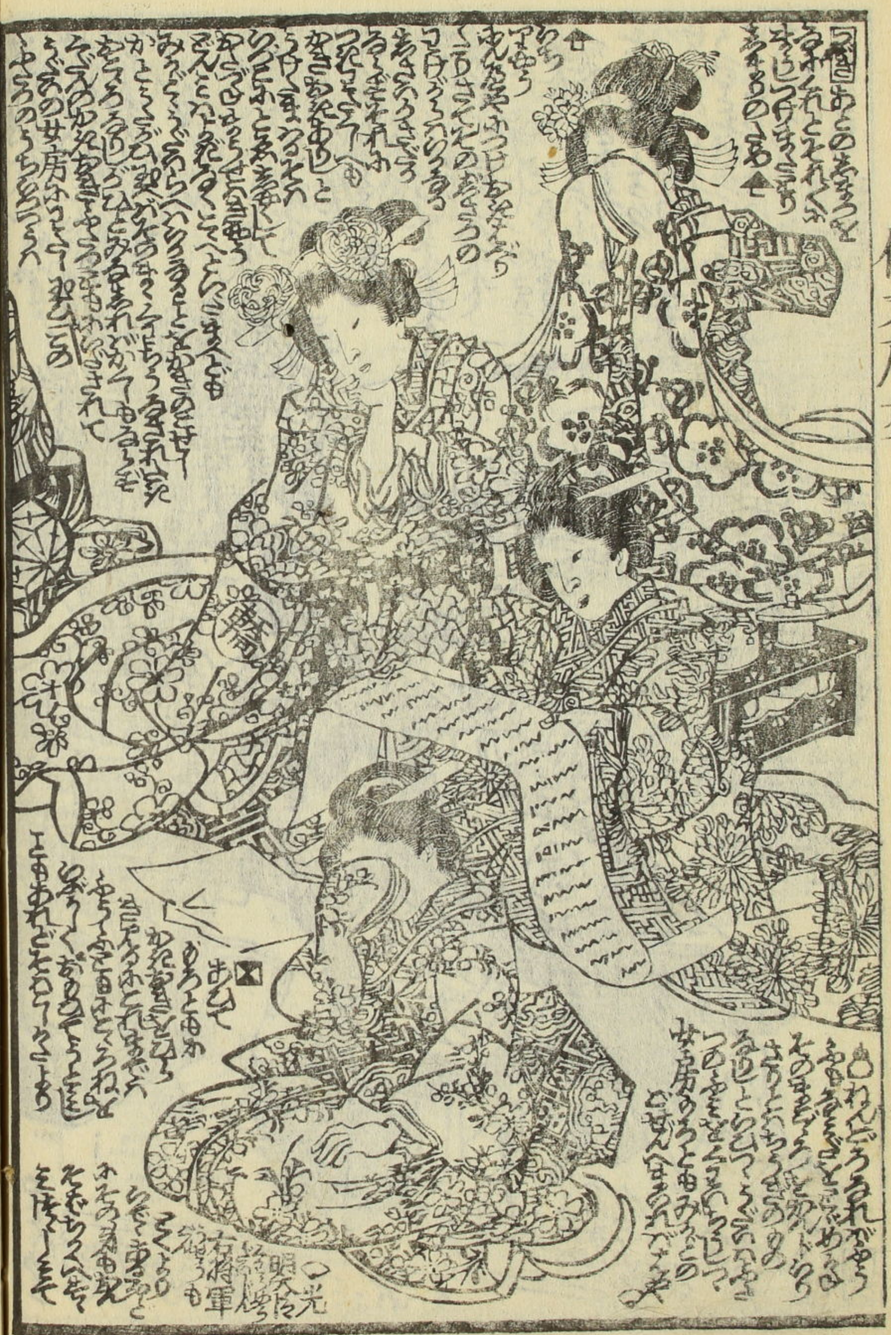




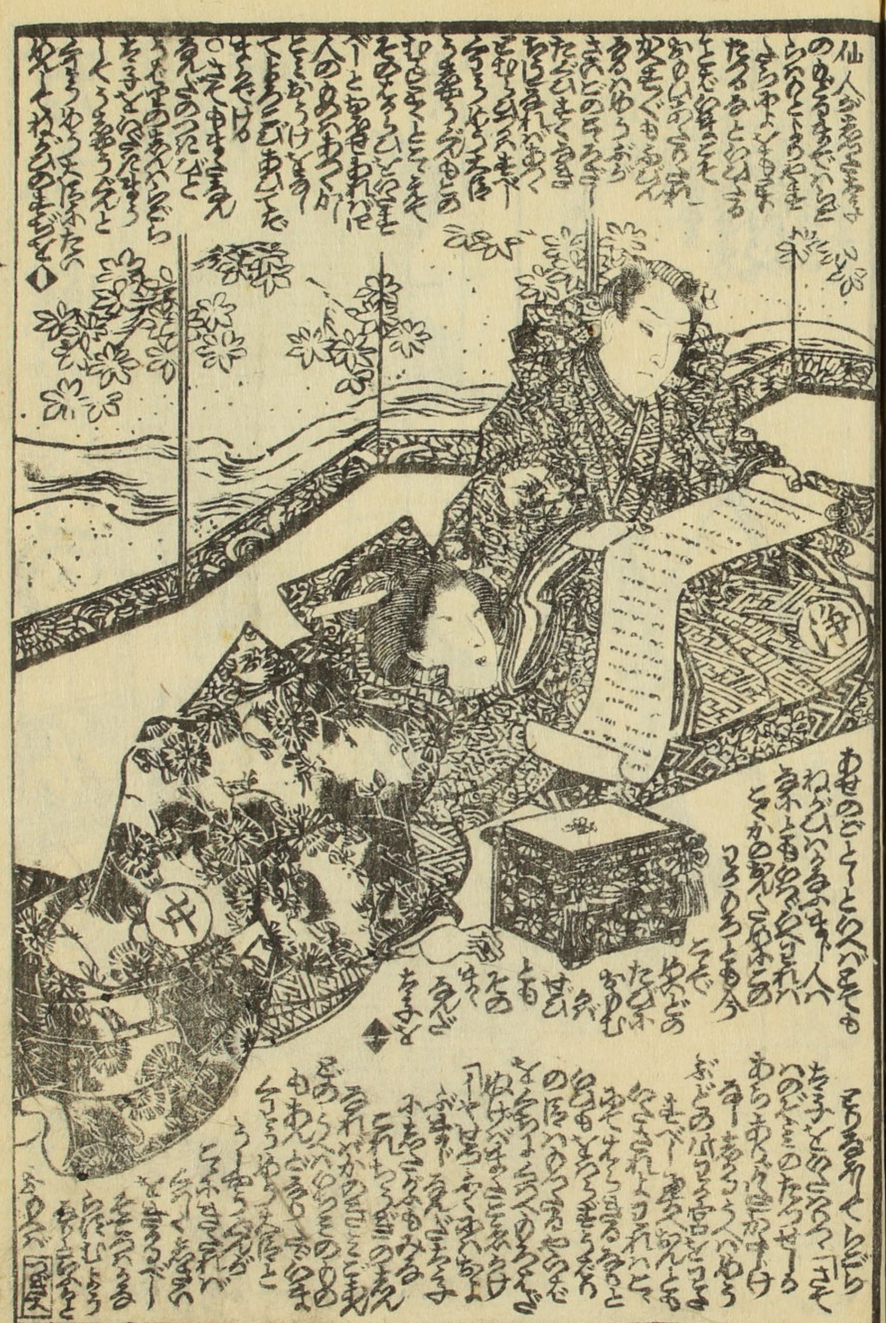







勝

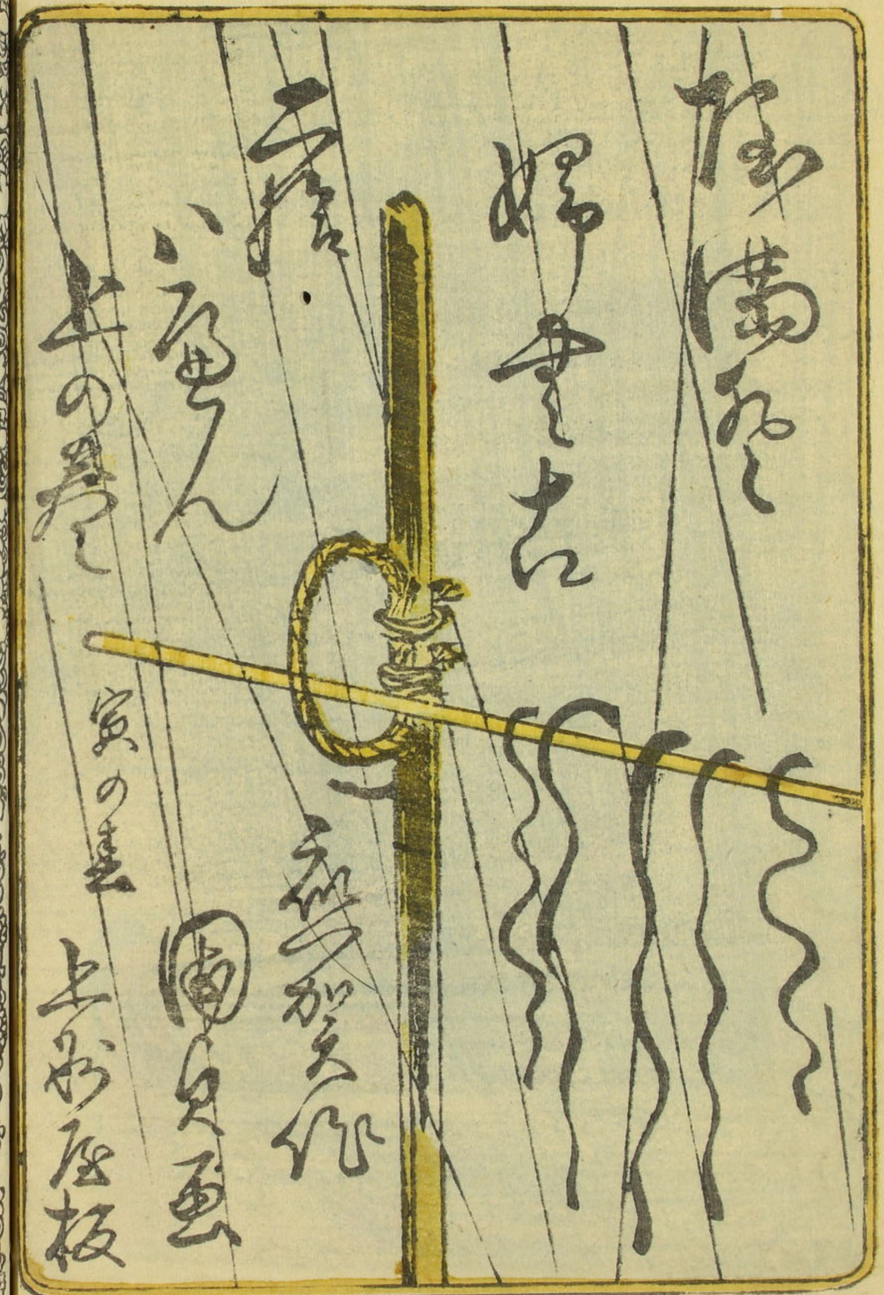
那
女



男女振分双六　万亭應賀作
奥奉公出世双六　一陽齋豊國画
奥奉公出世繪合　双六枚数百
極彩色　同作
文字太夫直傳　常磐津よせ方　同画
はうき心の外　小本　初編二編三編を出来
同たらず踊稽古　万亭作
童繪卅紙本類　人形町
板元　上州屋重藏

万亭應賀作

上



釋迦八相倭文庫二拾八編叙

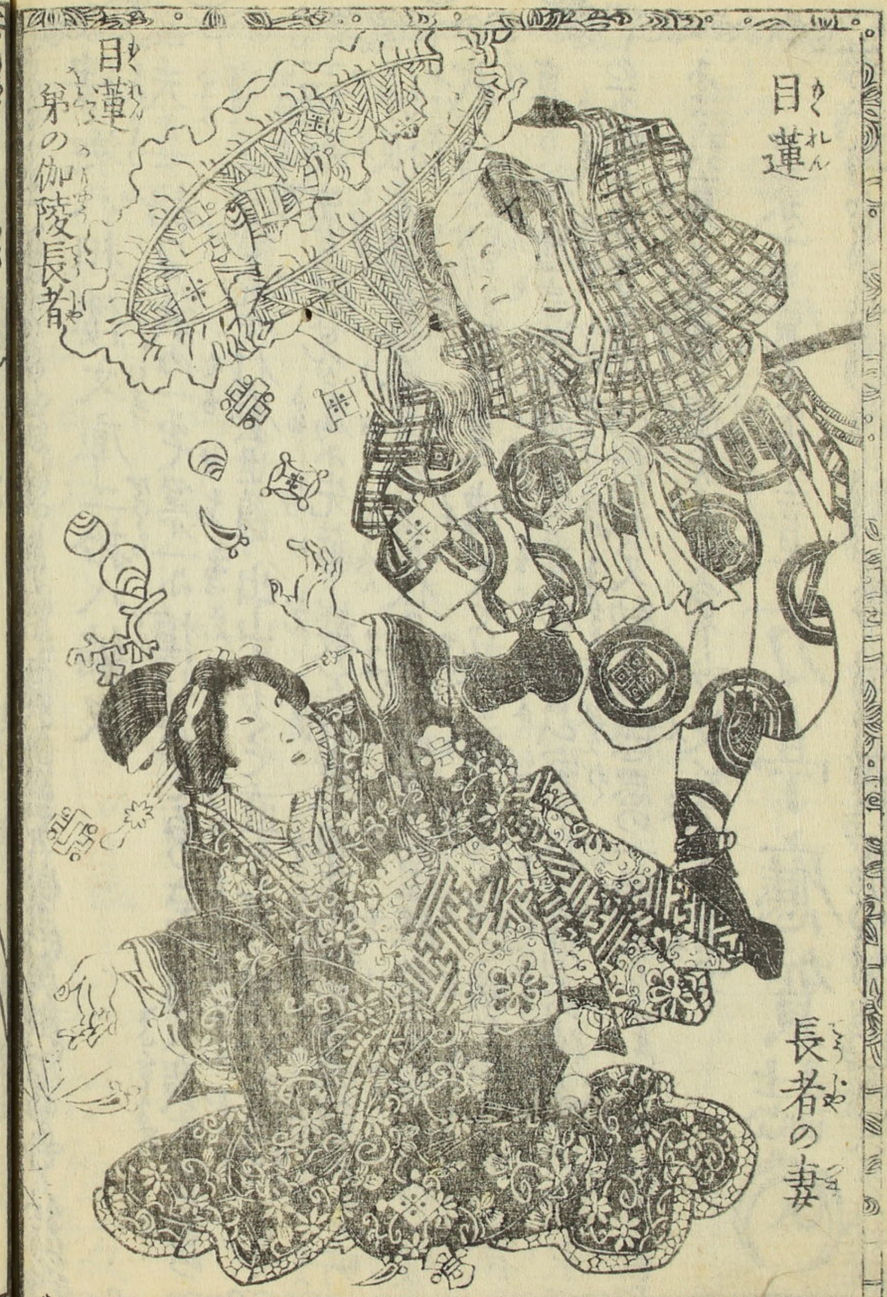
夫女語り五戒の一ぞ第一ゐ慎むべきとそりされども又廣大なる世の寶ともなりさらんや什麼世尊出山まりくて直ゐ三乗唯一心の道理とのそ一切衆生を度せんが為ゐ先華嚴を説ゐと聲聞縁覚ぞ啞龍の如く所化の根未熟なれば余義なく方便の花を咲せて后ゐ法華ゐ會せられ給復武士道ゐ謀計あり是ゐ嘘とのそ敵を圍り逆を討て國を治又商人ゐ掛直あり此も虚言とのそ渡世と妻子を養ひ家を弁況画工の繪虚稗説家の不断の虚言も或ゐ活計或ゐ勧善懲悪の一端なりさるべ七女語も善ふよれば真実言ゐ勝る徳あるぞなく方便を述るとゐて

嘉永七甲寅年正月吉旦

万亭應賀誌

日蓮

日蓮第の伽陵長者



長者の妻

安陸

安陸神酒甕を砕て五戒を示す

悩惱多き故に大神通力をもつて檀施を勧る

伽陵長者

釋迦如來
迦葉の家に宿りて
龍女が袈裟を
換へ又三迦葉と度して
法弟ぶつけ迦葉

三男
伽闍迦葉

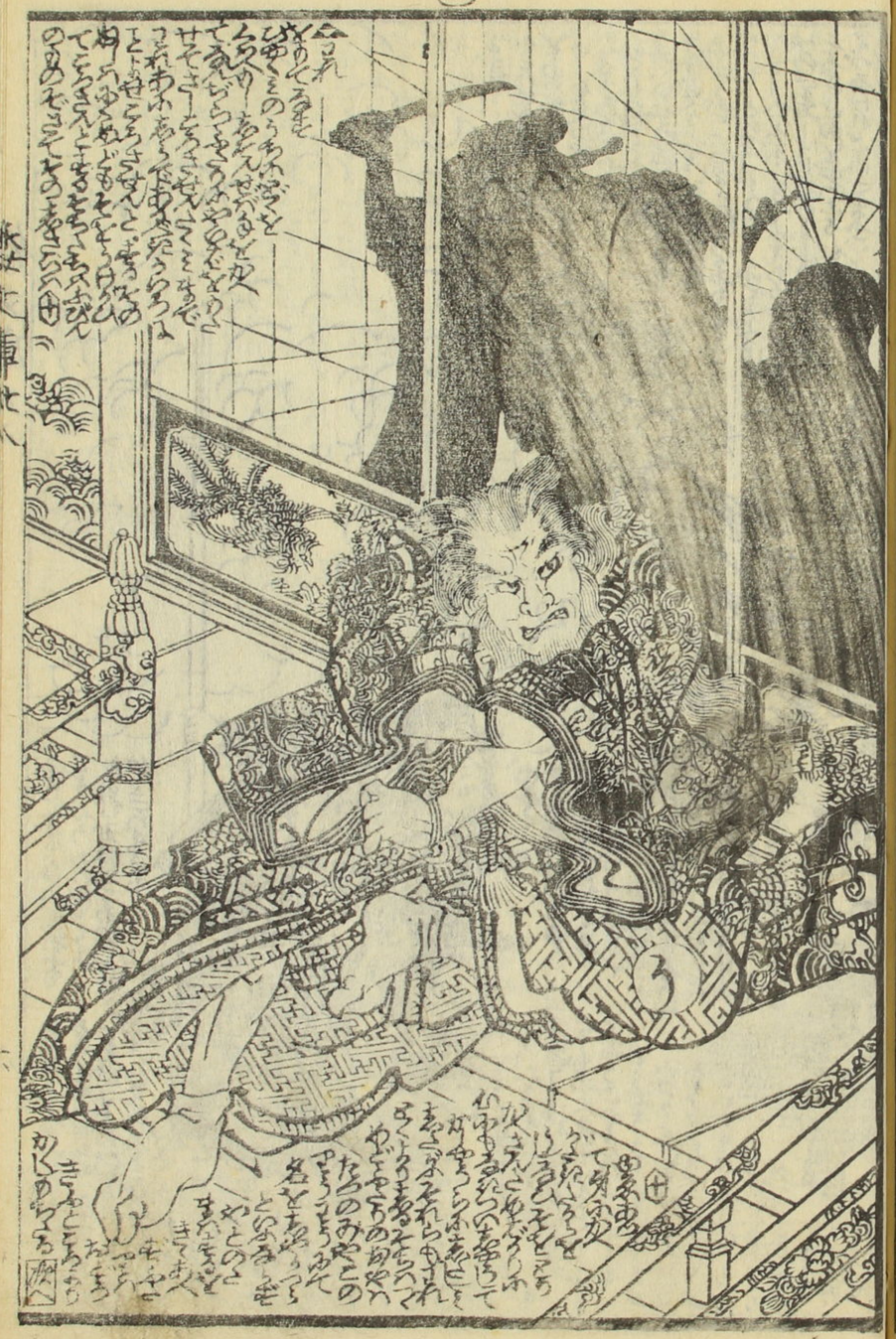
優樓頻螺迦葉

如来

姉宝鬘女

二男
那提迦葉

摩竭國の



波羅奈國の大施太子

金翅鳥の眞火

五百の小龍

舍利弗

舞

倭文庫　九七編ヲ三十編迄為出板仕ル　万亭應賀作　一陽齋豊國画

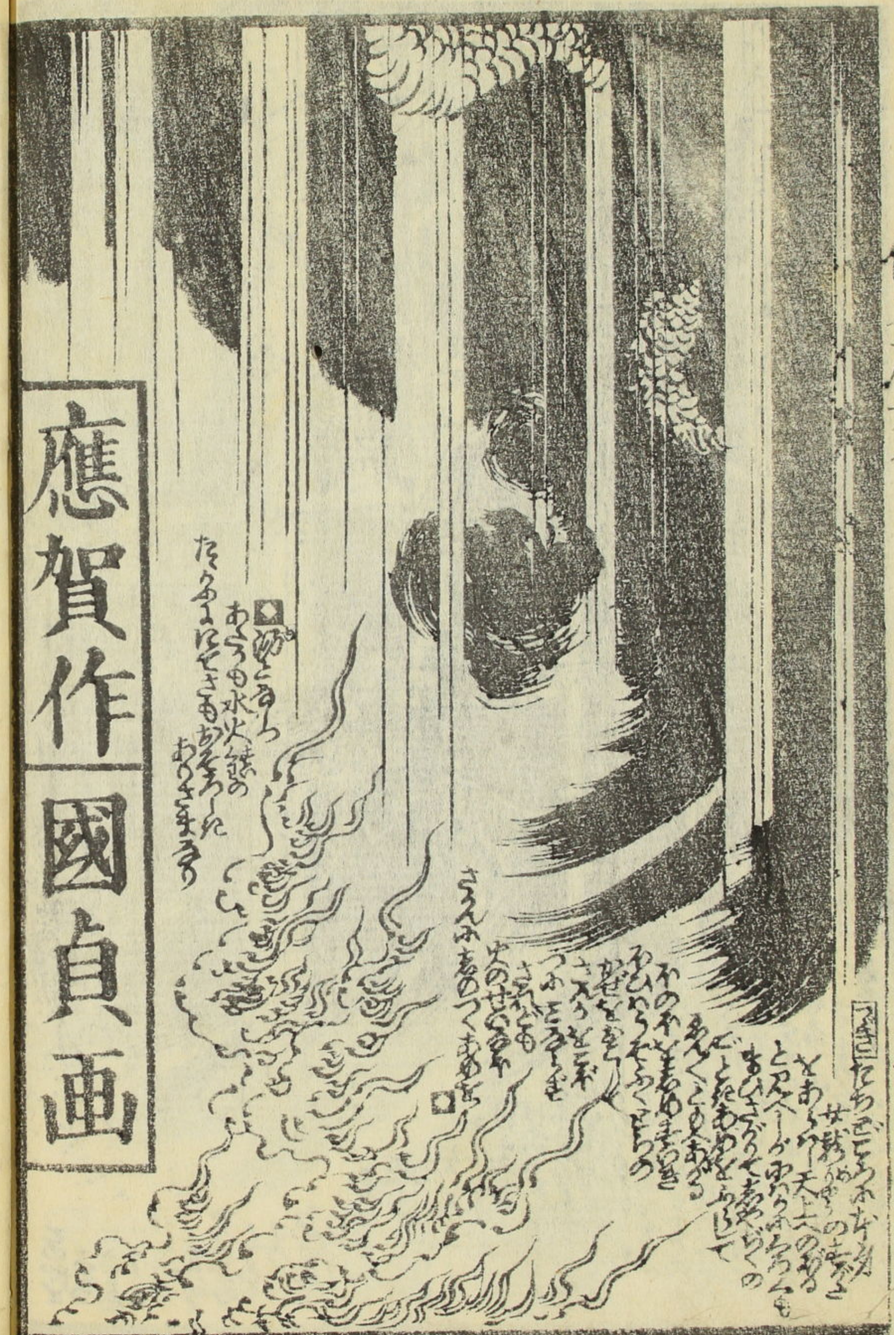
赤松譚　九編　如渊外史作　一圓齋國麿画

重ね井菱染別小紋　三編　為永春水作　一陽齋豊國画

茶番案文　四編　万亭應賀作　一陽齋豊國画

大寶御江戸圖　奉六枚半續　極上彩色摺　明細ニ改ル事ニ

童絵さうし李類　人形町　版元　上州屋重藏



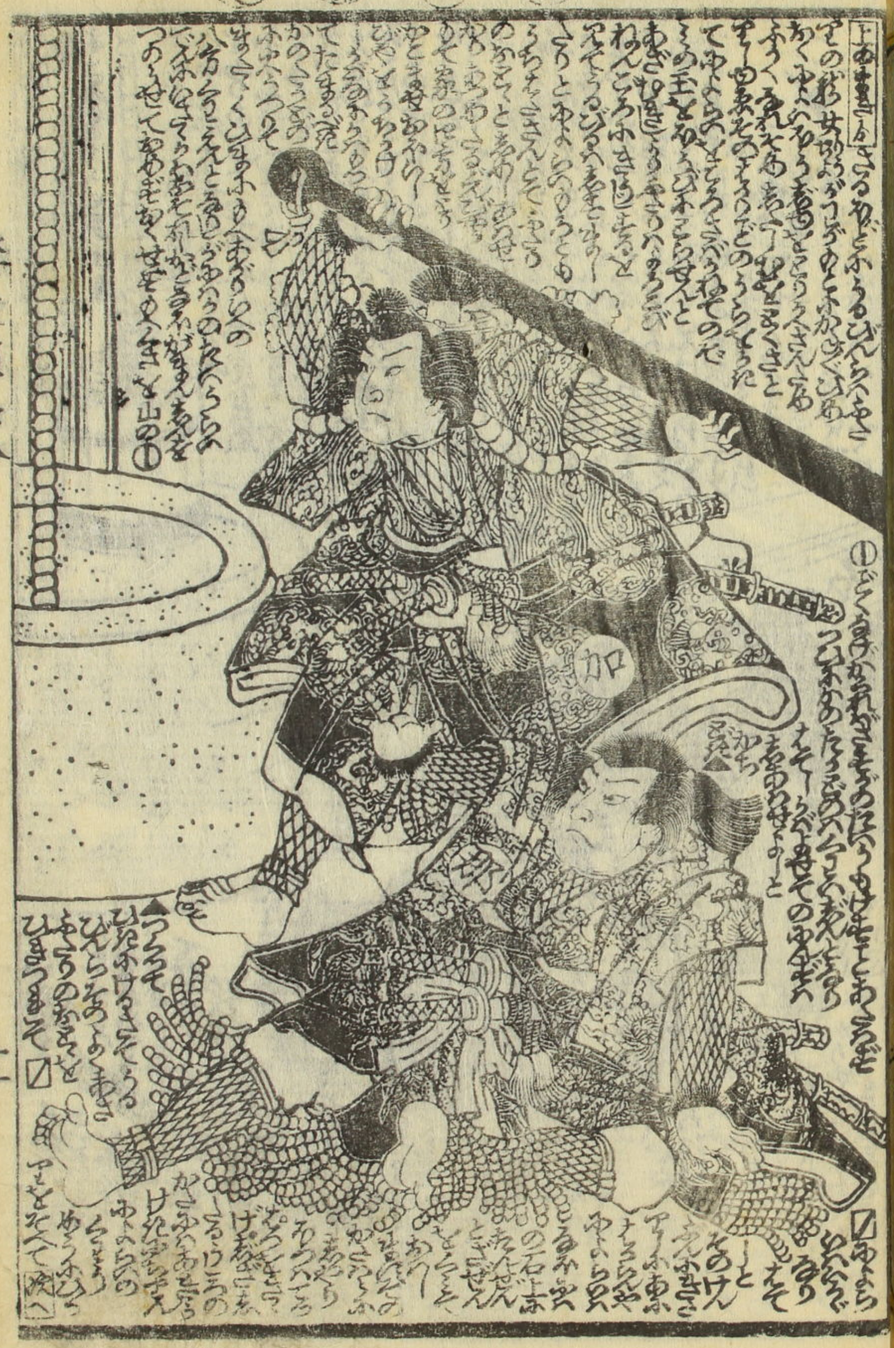
倭文庫二拾八編

二世歌川國貞画

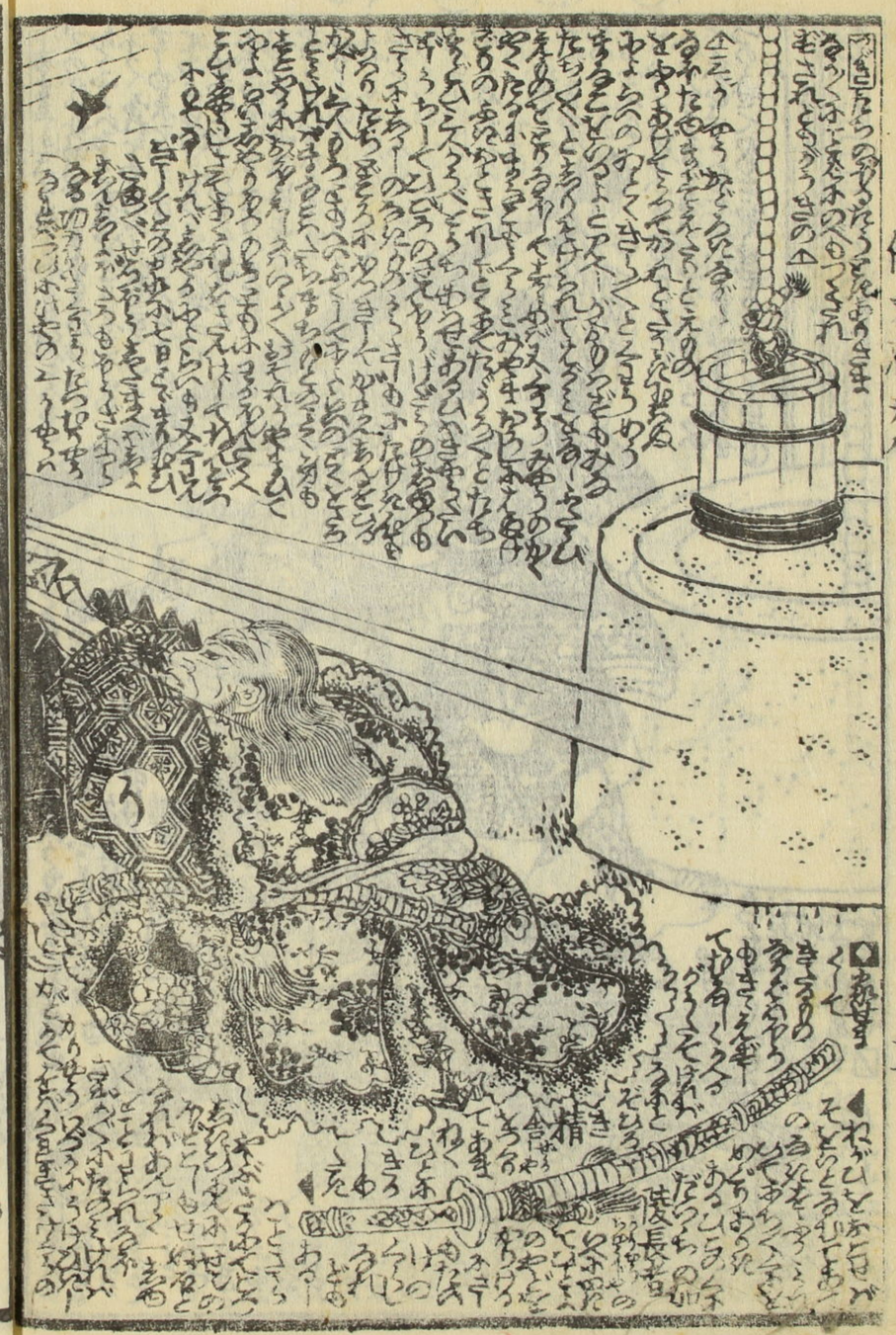
嘉永七年
甲寅春
新版

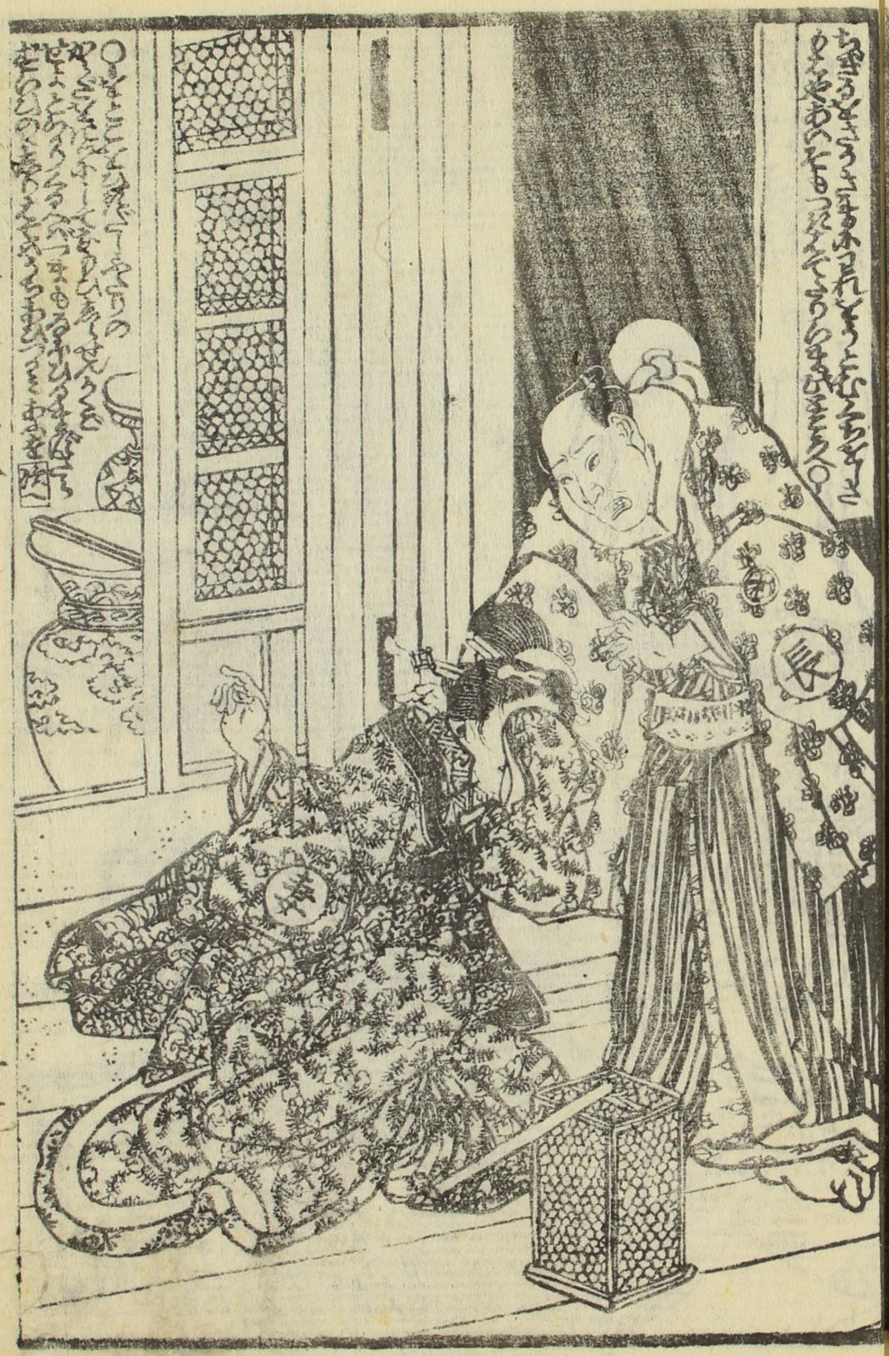
下

錦里堂版

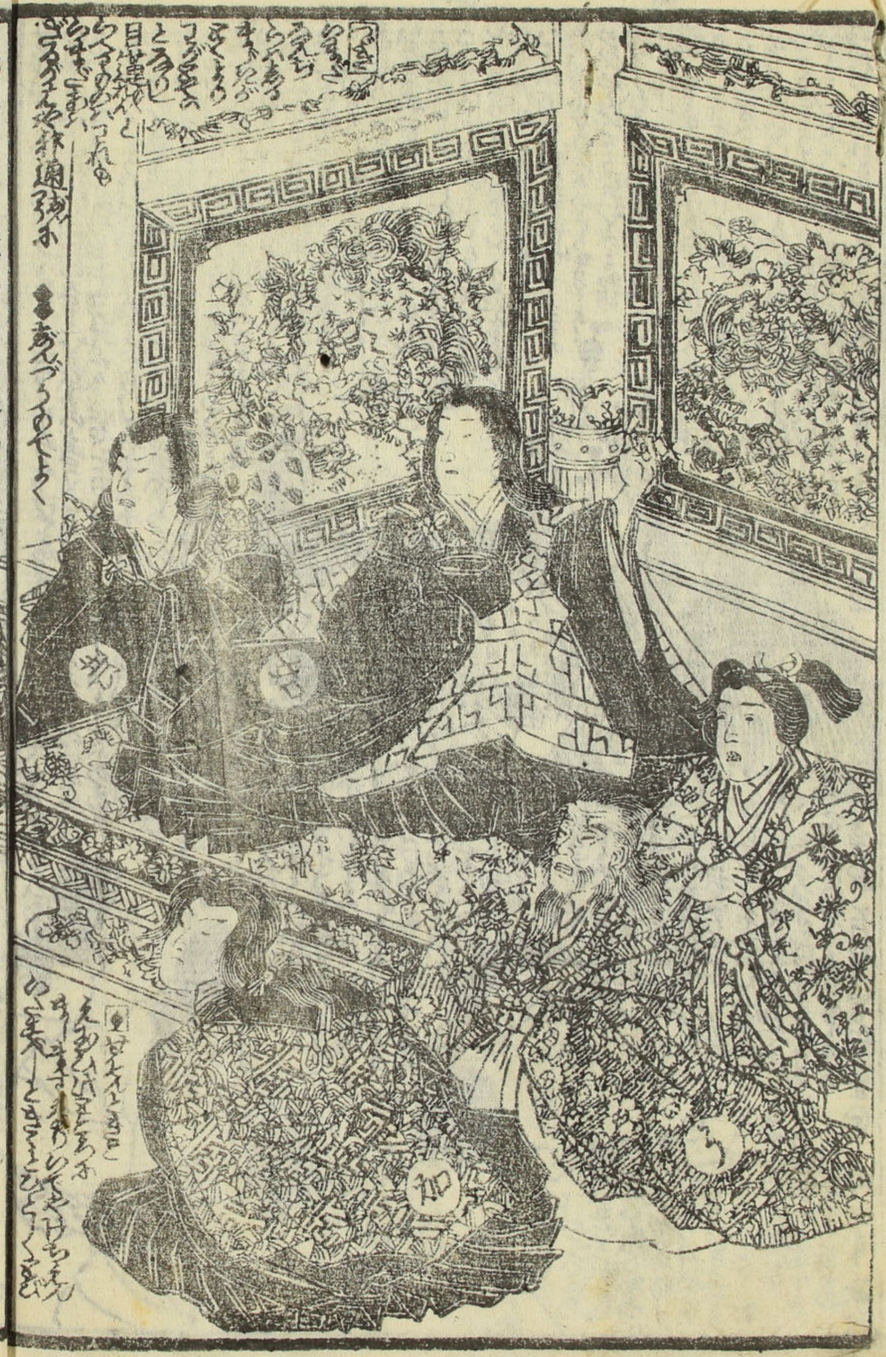


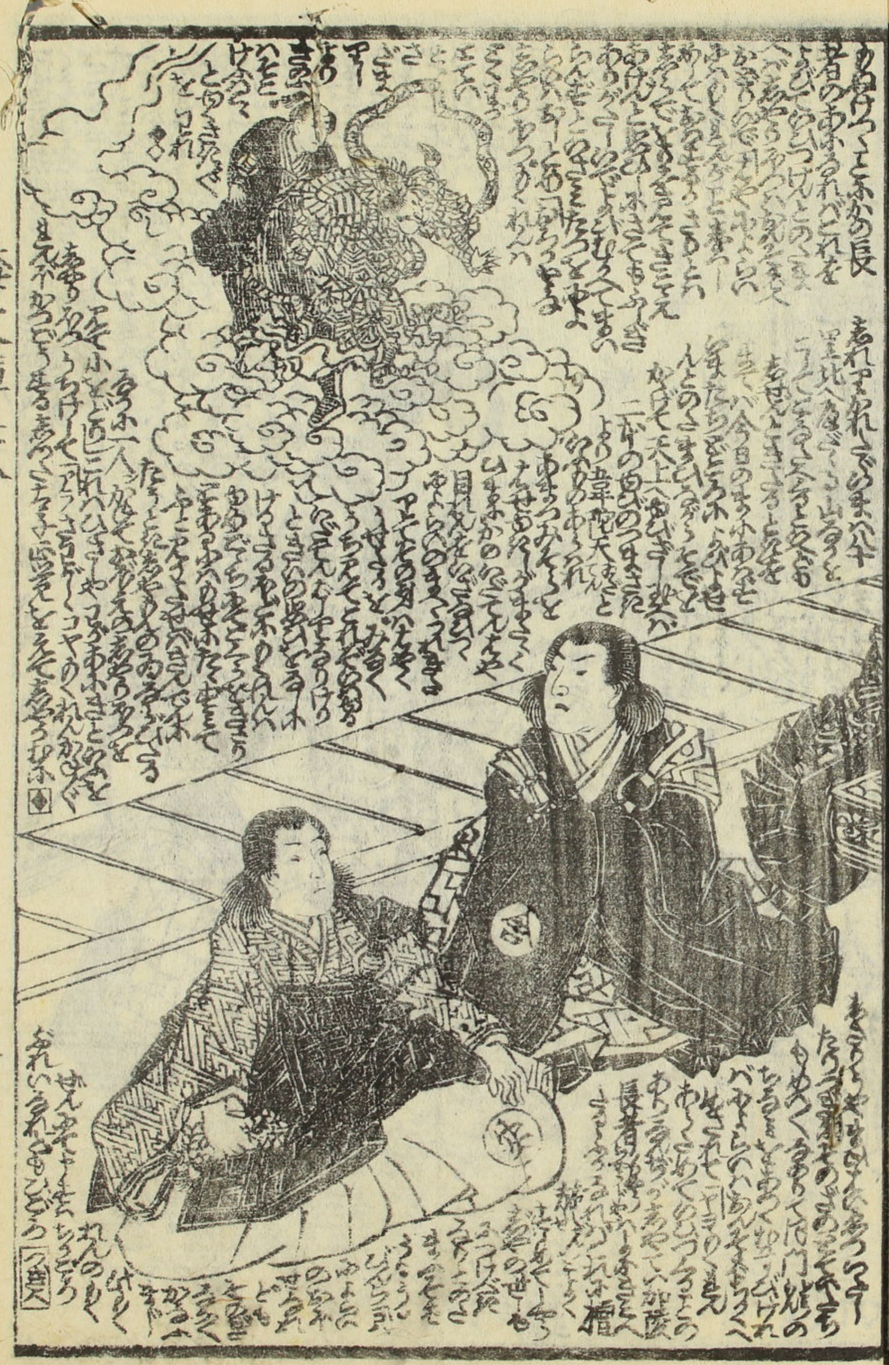
加

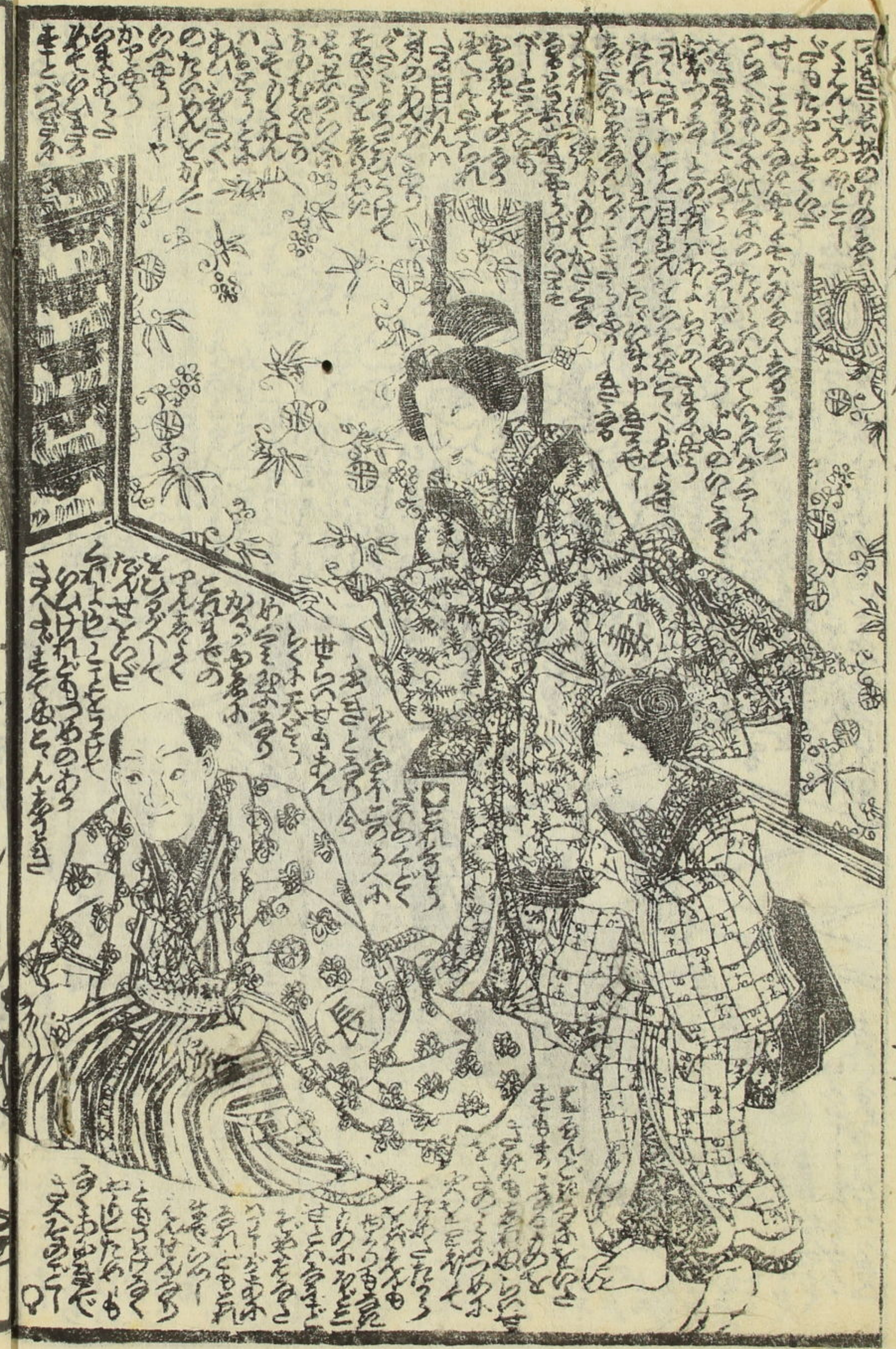


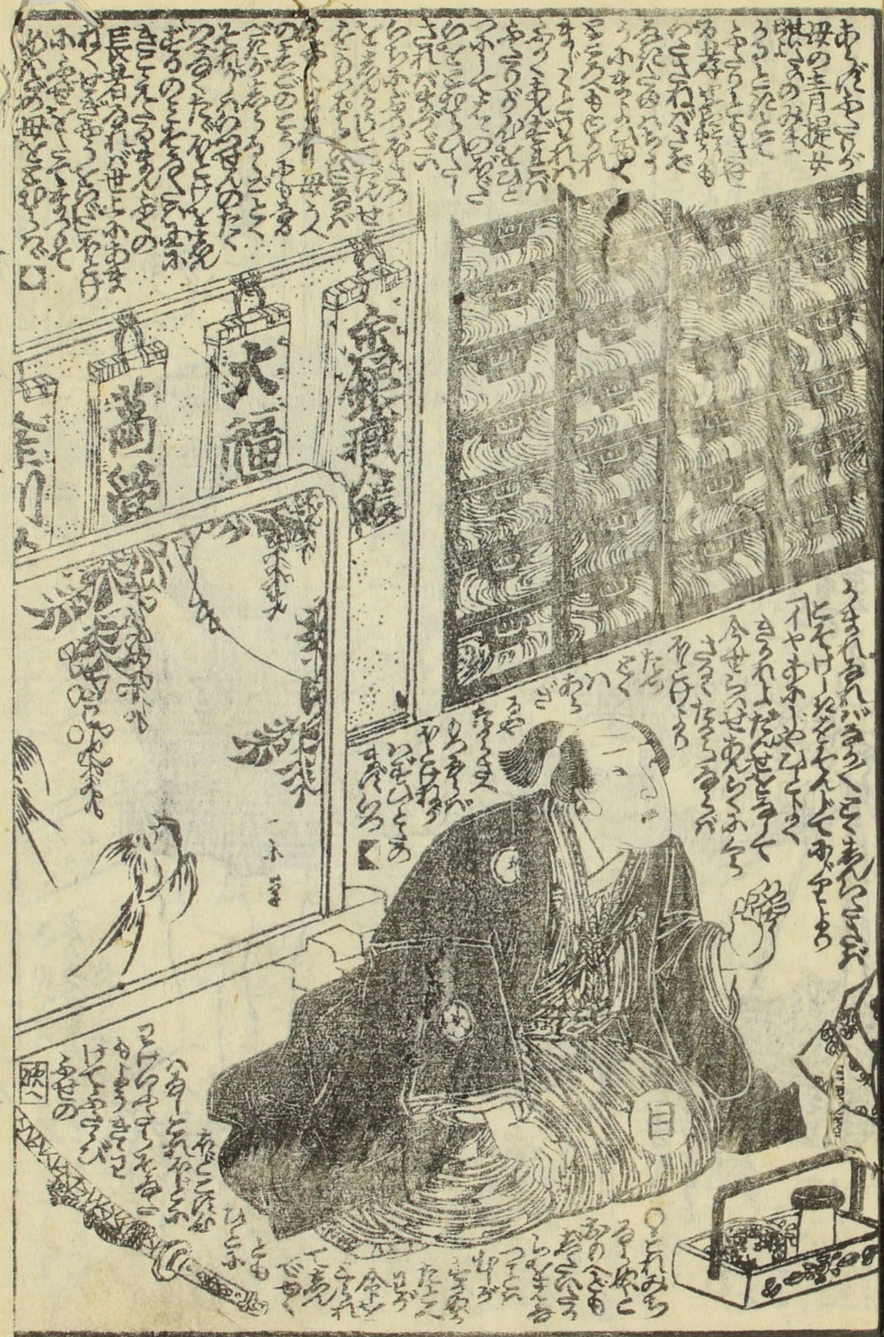


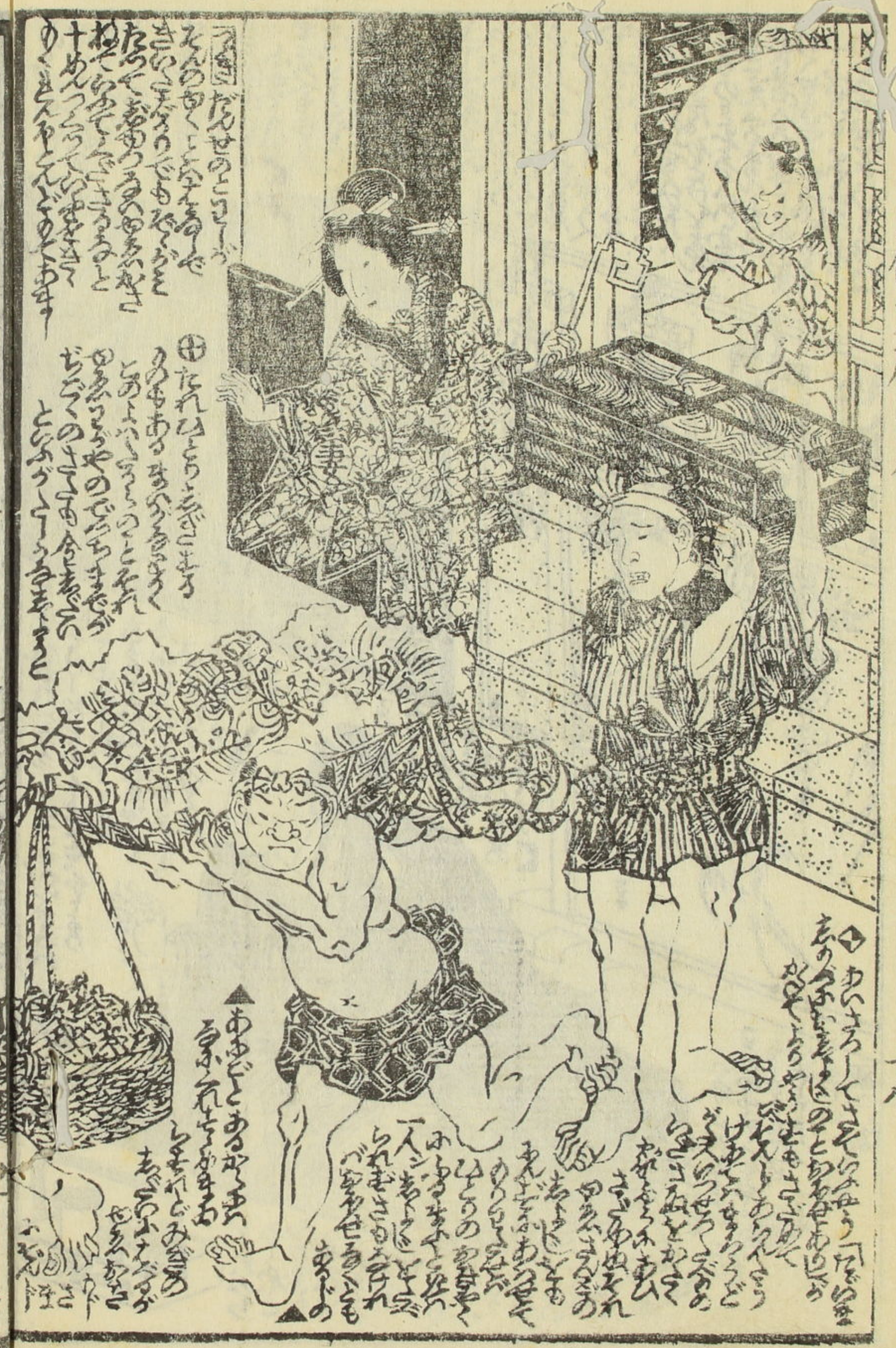
御膳酒








大福
萬盛



男女振分双六　万亭應賀作
奥奉公出世双六　同
奥奉公出世繪合　同
極彩色
文字太夫直傳　常磐津よせ本　一陽齋豊國画
はうき心の井　小本
同たとへ踊獨稽古　万亭作
畫繪紙本類　人形町　板元　上州屋重藏

万亭應賀作　歌川國貞画

屋満堂
文庫
三拾八編
万字名寄
歌門國寿